

---

# とある科学の超越移動《オーバーポイント》

黒炉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある科学の超越移動<sup>オーバーポイント</sup>

### 【Nコード】

N4728Y

### 【作者名】

黒炉

### 【あらすじ】

柵川中学1年D組に転入してきた仮初京哉<sup>かりそめきょうや</sup>。データ皆無の京哉は身体検査を受けるが、その結果は……え！？レベル5！？突如現れた8人目のLEVEL5。あ、なんだ、第八位か……は？原石？何それ食えんの？暗部組織アイテムに目をつけられながらも、俺は普通に生活してみせる！フラグ相手随時募集中！

**転校、身体検査へシステムスキャン（前書き）**

どうも、黒炉です。

このたびは、閲覧ありがとうございます。

他の小説と同時進行で行きますので、不定期更新になりますが宜しくお願いします。

## 転校、身体検査へシステムスキャン

学園都市。人口230万人の大都市。その8割が学生という学生の街。

その学園都市にある一つの中学、柵川中学に一人の転入生がやってきた。

「彼が今日から1年D組に転入する狩初京哉君だ」

待合室で、教師が一人の少女に一人の少年を紹介する。

「宜しく願います」

「おう。宜しく」

少女の名は初春飾利。第177支部所属の「風紀委員」。

少年の名は狩初京哉。ついこの間学園都市に来たばかりの、能力開発を受けて間もない少年。

「あの、狩初君の能力はなんなんですか？」

「うーん、知らね。無能力者とか言われたけど」

この学園都市では超能力の研究が日夜行われている。

学生たちは能力開発を受け、空間移動や精神感応といった超能力を身につける。

これらは大きく、

無能力者 レベル0 -

低能力者 レベル1

異能力者 レベル2

強能力者 レベル3

大能力者 レベル4

超能力者 レベル5

の6段階に分けられる。

「レベル0ですか？」

「詳しいことは分からない。今からシステムスキャン身体検査をする」

臨時で行われることになった京哉の為のシステムスキャン身体検査。学園都市としては、能力が分からない学生がいるのはあまり好ましくない。学園都市の人間の能力は、すべて「バンク書庫」と呼ばれるデータベースに保管される。京哉の能力も、同じように記録されるのだ。

「それでは運動場へ移動してくれ」

「はいはい」と

軽い足取りで運動場へ向かう京哉。

研究所からの報告では、一応は「空間移動系の能力者」ではあるらしい。

本人は何も考えてはいなかったが。

「あ~~~~結構固まってるな」

余裕綽々といった感じで伸びをする京哉。校舎からは他の生徒が顔を出していた。

転入生がいきなり能力を見せてくれるというのだ。気にならないものはいないだろう。

「君は“原石”なのかい？」

寄ってきた教師が聞きなれない単語を口にす。

「ゲンセキ？何それ？食えんの？」

「……原石とは、学園都市の能力開発を受ける前から超能力を行使できる人間のことだ」

「あー、なるほど。じゃあ俺は原石っすね。自分の身体も飛ばせませよ」

「既にレベル4は確定か」

空間移動系能力者は自分の身体を飛ばせるようになった時点でレベル4認定される。

まず京哉の前におかれたのは100kgほどの石の塊。

「コレを可能な限り遠くまで飛ばすんだ」

「コレを？」

「出来ないか？」

京哉は首を横に振り、石に触れる。

その途端、石はヒュンと音を立てて消えた。

「…………どこに飛ばした？」

「えーと、5kmくらい先に」

「なんだと？」

「もっと重いものでも良いですよ。そのクレーン車とか」

そう言うと京哉はクレーン車に触れ、能力を行使する。

ヒュンと音を立ててクレーン車は消える。

そんなことを延々繰り返し、京哉の学園都市生活一日目は終わりを迎えた。

「…………あれ！？俺これしかしてないんだけど！？」

結果通知：狩初京哉（空間移動能力者）  
テレポーター

最大飛距離：5893・349m

最大質量：47938・6kg

判定：LEVEL5（第八位）

……あれ？レベル5ですか？

こうして京哉の騒がしい学園都市生活は幕を開けた。



## 解説、身分証明へプロフィール〈前書き〉

アポリオンさん、感想有難う御座いました！

今回は、オリキャラ『狩初京哉』のプロフィールです。

## 解説、身分証明へプロフィール

名前：狩初京哉 かりそめきょうや

年齢：13歳

所属：柵川中学1年D組

身長：153cm

体重：39kg

容姿：黒髪を少し伸ばしている。中性的な顔立ちだが女性と間違えられることは少ない。

性格：基本的にひょうひょうとした軽い性格。友達思いでもあるのだが、学園都市の外では『原石』としての能力が災いしてほとんど

友達が出来なかった。自分とかかわりの無い人間に対しても冷酷である。子供が大好きで、性別問わず性格が激変する。知らない子供でも気がつけば守っちゃったりする。子供扱いされるのが大嫌いで、『ガキ』『チビ』などといった単語に敏感。必要があれば戸惑うことなく人を殺す。

能力：空間移動系の最高峰『オーバーポイント超越移動』。レベルは5。順位は第八位。

ナンバーセブンに並ぶ世界最大級の原石。

移動させたい物体に手を触れなければ移動できないなどの点は白井黒子の『レポート空間移動』と同じ。

異なる点は、物体の移動に1次元「ベクトル」を用いることが無い点。

1次元を算出しなくても物体の移動を可能とすることにより、一方通行のベクトル反射を無視して攻撃することも可能。

どういう原理で能力を発動させているかは不明。削板軍覇そぎいたくんは以上に自身の能力を理解しておらず、『とりあえず動かそうと思えば動かせる』程度。

一度に複数の物体を動かすことも可能。

また、自身の身体に触れてさえいれば、物体でなくとも移動させることが可能（電撃の槍や超電磁砲、原子崩しなど）だが、触れたと単に大ダメージになるものは結局移動させることが出来ない。

とにかくすべてにおいて異常な能力で、直接能力を使用することによる測定などでないとセンサーに引っかかるから無能力者認定レベルを受けてしまうなど、分からないことが多すぎる能力。

一度に飛ばせる物体の最大飛距離は5893.349m、最大質量は47938.6kg

と、現在はこんな感じですよ。  
アドバイス等ありましたら宜しくお願ひします。

## 出会い、超電磁砲ヘレールガン〈前書き〉

感想、フラグ相手の投票をしてくださった皆様ありがとうございます！

現在の票は、

黒子 2票

絹旗 2票

初春 1票

佐天 1票

フレンド 1票

となっております。

黒子&絹旗がトップです。

まだまだ投票は受け付けておりますので、よろしくお願いいたします。

## 出会い、超電磁砲へレールガン

「超電磁砲？」  
レールガン

「はい、この学園都市に8人しかいないレベル5の第3位、御坂美琴さんですよ！」

まるで自分のことのように誇らしげに胸を張りながら言う少女は初春飾利。シャッジメント風紀委員第177支部に所属する風紀委員だ。

「俺は第3位より0930事件のほづが興味あるけどなー」

と、かつたるそつに返す少年は狩初京哉。

ついこの前学園都市外からやってきた8人目にして第8位のレベル5。

「どうしてですか！？確かに分からないことだらけの事件も興味はありますけど！」

「そこで興奮するなよ……。まあ他のレベル5がどんな奴なのかは気になるけどな」

0930事件には、不可解な点がたくさんあった。外部の侵入者が犯人だとか、見たこともない天使が現れたとか、次々と人が倒れたとか、到底真実とは思えない様々な噂が飛び交っているのだ。

「まーまー、落ち着きなよ初春」

そう初春に話しかけてくるのは佐天涙子。

京哉、初春のクラスメートだ。

「なー、コイツいつもこんな感じなのか？」

「いや、いつもはもつと落ち着いてるっていうか……」

「……………御坂つてすげえな」

同性すら虜にする第3位にちょっとびっくりしてみる京哉。

初春によれば、『超電磁砲』とは最強の電気使用エレクトロマスタ、コインをローレツツ力で加速させ打ち出す『超電磁砲』から『電撃の槍』『砂鉄剣』までとにかく応用性が半端ないらしい。

(思いつきりチートみたいな能力だな)

自分はいくまで物体の移動しかできないのに、と京哉は心の中で不満を呟いた。

「で、その第3位がどうかしたのか？」

「今日も会う約束なんですよ！御坂さんと！」

「で、どうしてそれを俺に言うのかな!？」

初春のあまりのテンションの高さにつつとおしさを隠すことさえままならなくなってきた京哉である。

「いいじゃないですか。レベル5同士、親睦を深めても」

「別にいいってのに……………」

「ああなつた初春は止まらないから」

目を輝かせる初春を見る京哉と佐天の目が温かいことに、初春は気付かない。

とある駅前のお茶店。

京哉はガラスに顔をくっつけ、初春と佐天は目をそらしていた。

「……………なんじゃありゃあ」

「あー、なんていうか……………」

「あれが御坂さん……………です……………」

京哉の視線の先には肩まで届く短めの茶髪にヘアピンを付けている少女と、同じく茶髪ツインテールの少女が店内で大胆に抱き合っている姿があった。

『……………!??く、黒子!離れなさい!見られてる!見られてるから!』



『お姉様、見られてるくらいで御騒ぎにならないでほしいですの〜』

「……………（どっちかわかんないけど）あれが第3位……………？」

「残念ながら……………」

『初春さんに佐天さん！？聞こえてるから!!』

来たのはやはり間違いだっただか、と京哉は肩を落とした。

「で、そちらの殿方は誰ですの？」

「あ、ども、狩初京哉です」

「私は御坂美琴。よろしく」

「白井黒子ですの。よろしくお願いいたしますわ」

「よ、よろしくです」

“原石”という特殊能力のせいで今まで他人との関わりがほとんどなかった京哉は緊張気味に自己紹介をする。

「緊張しなくてもいいわよ。それよりなんか頼みたいんだけど」

「黒子はお姉様を注文したいですの」

「アンタは黙ってなさい」

変態がいる……

学園都市の恐ろしさを味わった京哉である。

「ふい、ふいふあいふえふふお（い、痛いですの）」

「アンタが余計なこと言うからでしょ」

黒子のほっぺをぐいぐい引っ張る美琴。

「なあ初春？この人たちはいつもこんな感じなのか？」

「まあ大抵は……」

「レベル5ってこう、もっとカッコいい人だと思ってたけどなあ……」

京哉の中のレベル5のイメージが音速で崩れていく。

「勘違いしないでね！おかしいのは黒子<sup>コイツ</sup>だから！」

「はあ……」

と言われても……とため息をつくしかない京哉。

「本当にお姉様は容赦がありませんの……で、京谷くんは初春とはどういう御関係で？」

「きよ、京谷くんですか？」

「ええ……だって、見るからに小学生じゃありませんの」

黒子はNGワードを放った。

「……………だれが」

「「「「「？」「「「「」

ブルブルと震えだす京哉と、それを不思議そうに覗き込む4人。

「だれが世界最小幼稚園児だあ—————！！」

「そ、そこまで言ってますんの！？」

どごそのチビ錬金術師のようなシャウトが響く。

「とまあ普段ならこのまま大気圏までぶっ飛ばしてる所なんですけど」

「い、いま怒ったのはなんだったの……」

「さ、さあ……」

が、普段通りに戻った京哉を見て美琴と佐天は顔を引きつらせる。

「は、話を戻しますね。白井さんと御坂さんは、オーバーポイント超越移動って知ってますか？」

「勿論ですの。8人目のレベル5、空間移動系能力者の頂点、1次元の算出を行わず物体を移動させる驚異の能力者、だったと思いますの」

「その超越移動がどうかしたの？」

「その超越移動が、この狩初京哉君なんですよ！」

「………は？」

美琴と黒子の目が点になる。

それも当然だろう。突如現れた8人目のレベル5が目の前にいて、ソイツは未知の能力を使って、見た目小学生なのだから。

「だれが小学生だコラ」

訂正。ちよつと小柄な中学生。

「？ 誰と話してますの？」

「あ、いや、なんでもないですよ。ははは……」

「それで初春さん。その子が超越移動って話、本当なの？」

「ホントですよ！この目で見たんですから！」

「もー凄かったんですよ！？こんんな大きなクレーン車を、簡単に移動させちゃったんですから！」

「いやー、それほどでもありますけどー」

ここぞとばかりに京哉を褒めまくる初春と佐天。そして顔を赤くする京哉。

しかし京哉を見る黒子の目は細い。

「京谷k……狩初君は、一体どうやって物体を移動させてるんですの？」

「はい？」

黒子は真剣な顔つきで自分の疑念をぶつけるが簡単に返されてしまふ。

「ですから、通常の空間移動系能力者は1次元「ベクトル」を用いて移動していて、貴方は1次元の特殊演算を行っていない。なら貴方はどうやって物体を移動させているのか、教えてほしいんです」

テレポーター  
同じ空間移動系能力者として、一体どういう原理で超越移動が発動しているのか。

単純な興味だった。

だが指摘されてみれば、黒子をよく知る美琴や初春にとっては気に

なる内容でもある。

佐天は何が何だか分からないという顔をしているが。

「あー、そういうこと。えっとね……」

少し悩んだ後、京哉が出した結論は

「よくわかんね」

だった。

「いや、『わかんね』な訳ありませんの。空間移動は他の能力と比べても行う演算による負荷が大きいのは証明されて……」

「だから難しい話はよく分ないけど、とにかく『動け!』って思ったら動かさんの」

「なんてアバウトな……」

「それでよく物体の移動なんてできますね……」

「それはちょっと白井さんが傷ついちゃう気が……」

「うう……ありえませんが……こんな何も分かってない奴が黒子より格上だなんて……」

「え？何？俺なんかおかしなこと言いました？」

美琴、初春、佐天は京哉のまさかの発言に呆れ、黒子は空間移動系能力者としてのプライドを傷つけられたのか、その場で体育座りに

なっ  
てし  
まじ  
う。

## 強盗、蛋白爆破へプロテインボンバー

狩初京哉、御坂美琴、白井黒子、初春飾利、佐天涙子も5人は手を頭につけていた。

なぜこうなったかという強盗に遭遇したからである。

「……めんどくさいな。あんなのさっさと倒しちゃえばいいじゃないですか。こっちにやレベル5が二人もいるんスからあ」

「だ、ダメですよ。人質が取られてるのに！」

京谷はさっさと倒して終わらせるべきだというが、初春は人質に危害が及ぶことを危惧して京谷を引き留める。

「初春の言うとおりですの。ここは様子を見るべきだと……」

「もーめんどくさいじゃんよー！別にいいじゃんよー！たおしちゃえばー！」

どこかの巨乳警備員のような口調で駄々をこね始める京谷。見た目小学生なだけに、違和感がまったくない。

「アンタね、人質が取られてるって分かってる？」

「分かってますよ？それが？別にアレは俺には関係ないし、どうなっても関係ないし」

「……ッ！ アンタねえ！」



美琴が京谷の胸倉を掴み上げる。

「しょうがないじゃないですか。俺は知らない人間のために死ぬなんてまっぴらゴメンですから」

「いい加減にしなさいよアンタ！さっきから聞いてれば……！」

「うるせえぞ！！コイツを吹っ飛ばされたくなかったら黙ってる！！」

レベル5同士が本気で闘りあおうとしているところへ強盗が人質の首を絞めて黙らせる。

美琴は舌打ちしながら京谷を元の体勢に戻るが、京谷はどちらでもいいという顔をしているだけだ。

「分かってねえようだから教えてやるぞ！！俺は触れた蛋白質を爆発させる能力……蛋白質爆破を持ってんだぞ！俺が触れただけで、お前らは簡単に消し飛ぶってことを忘れるな！！」

強盗の男が大声で自分の能力を豪語する。

「……なあ、つまり人質を傷つければアイツをぶっ倒してもいいんだな？」

「え？」

京谷は言うつと同時にまず左右に座っていた初春と佐天の肩に触れる。ヒュンツと音とともに、二人が消え、さらにそのまま美琴と黒子の肩に触れ、二人を店の外に飛ばす。

「さて……」

京谷は両腰に手を当ててあたりを見回す。  
店内にいる人間は人質さん含めても数人。

「……いけるな」

京谷はまず自分の体を犯人の真後ろに移動させる。  
テレポルト  
そして人質に肩に触れ、

「まず一人目」

店外へ移動させる。

「んな……ッ!？」

「よっと」

そのままの体勢から犯人のがら空きになった懐に一発パンチをお見舞いしてやる。

中学生程度の腕力でも、まったく無警戒の腹はキツイ。

相手が体勢を崩しているうちに残っている客もすべて店外へ移動させる。

犯人がなんとか立ち上がれるようになったころには、店の中には京谷と犯人しかいなかった。

「このガキ……！  
テレポーター空間移動系能力者か……！」

「そ。運がないねアンタ。どういいうつもりか知らないけど、一大決心して狙った店にいるのが超能力者。  
レベル5運がないってか不幸ってか」

「レ、レベル5だと……!?まさか、  
オバーポイント超越移動か……!？」

京谷は100万ドルの笑顔で

「そゆこと。運のない強盗さん」

姿を消した。

「……！？ 逃げやがっ……がっ！？」

「んな訳ねえじゃん。せつかくチカラを試す相手ができただ。いろいろ実験させてもらっぜ」

相手の背後に移動し、後ろから足払いをかけて倒し、上から覗き込む。

京谷はそのまま厨房まで歩いていく。

「ふむふむ……。こんなのいいかも」

そこで何かを吟味したかと思うと……手に持っていたフォークをどこかへ移動させた。

「があああああああああああああ！？」

同時に強盗犯の悲鳴が響く。

強盗の左腕を、フォークが貫通していた。

「痛いだろ？ま、アンタも高くてせいぜい大能力者<sup>レベル4</sup>なんだろうしさ、ただのレベル4の強盗<sup>レベル5</sup>如きが、超能力者に勝てるわけないじゃん」

痛みで聞こえてないかな？と言いながらさらに数本のフォークやナイフを手取る。

「……………!!」  
「よっと」

ヒュンツと音を立ててそれらは消え、今度は強盗犯の背中とわき腹に突き刺さった。

「ぎゃああああああああああああ!!!!」

「お、まだ死なないか。……えっと、これでいいかな？」

今度は厨房にあった大ぶりのリンゴを手に取り、

「リンゴで死ぬ気分をご堪能ください」

それを頭の中にテレポートさせた。

強盗事件の発生から数十分後、アンチスキル警備員が突入した時には中には人間は一人もおらず。そこにあるのは人間だったものだけだった。

「……酷いじゃんよ。どうしてここまで残酷に殺すことができるじゃん」

警備員の一人、黄泉川愛穂は頭部を内側から破裂させられた死体を見ていた。

黄泉川は破裂した頭部と思われる（損傷があまりにも酷く原形をとどめていない）の中心に落ちている赤黒くなったりリンゴを見つけた。

「頭の中にリンゴをレポートさせたのか。やることが残酷すぎるじゃんよ」

「黄泉川さん、ジャッジメント風紀委員の方が」

部下に呼ばれ、店の外に出て行く。

学園都市に所属する教師で構成される警備員アンチスキルと違い、ジャッジメント風紀委員は学生による治安維持組織だ。

あれは子供には少々刺激が強すぎる。

「黄泉川愛穂じゃん。よろしく」

「風紀委員第177支部所属の白井黒子ですの。以後、お見知りおきを」

「それで、犯人に心当たりがあるじゃん？」

「ええ……、あの状況で、能力的に考えても一番可能性が高い人物を一人、知っておりますの」

黒子は少し間をおいて、ついさっき知りあった自分より上位の空間移動系能力者の名を告げた。

「学園都市に8人しかいないレベル5の第8位……オーバーポイント超越移動、狩初  
京谷ですの」

## 強盗、蛋白爆破へプロテインボンバー（後書き）

現在の票は、

黒子 3 票

絹旗 2 票

初春 1 票

佐天 1 票

フレンダ 1 票

黒子一歩リードです。

まだまだ投票は受け付けておりますので、よろしく願いします。

（追加設定）

通常、空間移動系能力者が同じ空間移動系能力者を移動させようとする時、お互いの能力が干渉してしまい、移動させられない。が、京谷はなぜかこの法則を無視し、白井黒子などの空間移動系能力者を移動させることができる。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4728y/>

---

とある科学の超越移動《オーバーポイント》

2011年11月19日12時47分発行